

突発ワンライ「『曲名』《語るなら未来を》」

今日は結婚式の打ち合わせで衣裳決める日。

「ごめんってば、タキシード着て見せて欲しかったただけなんだ。悪気はないんだよ……」

「それで僕にタキシードを着ろって？胸がないのを馬鹿にしているのかい？」

「そんなつもりは毛頭無い。本当にごめん」

「……まあ、披露宴のお色直しで僕がタキシード着て、晶がドレス着るなら良いかも知れないね」

そこからトントン拍子で着る衣装が決まっていた。結局僕は結婚式自体は光沢のあるシンブルなウエディングドレスを着る事になった。そんなふわふわしてなくていいって晶に言ってるんだけど、一切譲らないから困る。

「式は何時にするの？」

「えへへ、セナ。ふわふわなドレスでいいの？いや着てもらうんだけどさ」

「別にふわふわした可愛いドレスもいい思い出だと思うからね。晶にはちよつとタイトなドレス着てもらおうかな。まあまず式の日程を決めないとさ、せつかく語るなら未来を決めないとね」

忙しい僕らが交代で式の打ち合わせに行くものだから、流石にプランナーの人も『ウエディングドレスとタキシードだけはお二人で揃ってお願います』って怒られちゃった。そろそろ招待状送る人も選びはじめなきゃ、この仕事始めてから人付き合いが増えちゃったからねえ。

「そういえばさ、セナは何人ぐらい呼ぶつもりなの？同業以外でさ」

「十人もいないんじゃないかな。ほぼこの仕事始めてからの友達が多いもの。そういう晶は？」

「んー十人くらいかな」

「僕といっしょじゃないか……。お互い一般人の知り合い少ないね」

「この忙しい生活に付き合ってるのはやはり同業が多いからじゃないかな」

「さ、もうちよつとしたら僕は撮影に行かなきゃ行けないからもう行くね、晶後で自分が着たいウエディングドレスの試着送ってね。じゃ、プランナーさんありがとうございました、また次の時迄に式の日決めてきますねって電話来ちゃった。バイバイ」